

1

年生

Global Geography

グローバル地理

探究的な学習のスタートとなる必修科目です。

まず「課題探究とは何か」を理解し、「探究の技能」を学んだうえで、環境・資源・エネルギー、災害、食料、貧困、人口、ジェンダーなどのグローバルな社会課題を広く知り、「持続可能な社会の探究I」で自分が追究したいと思える課題を見つけます。

グローバル地理

1

課題研究とは何かを知り、探究の技能を身につける

フィールドで体験的に学ぶ

「グローバル地理」では、単元「課題探究とは何か」の活動の一つとして、入学間もない5月に2泊3日の諏訪フィールドワークを実施しています。グローバルな社会課題に先立って、生活圏の課題に目を向け、①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析・考察 ④まとめ・発表 ⑤新たな課題の設定という一連の探究的な学習の過程を経験することにより、課題探究とは何かを体験的に学ぶことを目的としています。

まず事前学習において、地域の情報や地理的特徴を収集した上で課題を設定し、その背景や解決に向けて実際に行われている取り組みを調査します。そのうえで自分なりの課題解決に向けた考察をレポートにまとめ、生徒間で共有します。

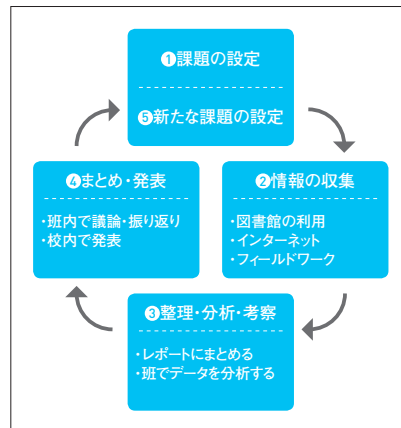
次にいよいよフィールドに出ます。現地調査を通して実際に自分の目で見ること、聞き取りを行うことにより新たな情報を収集し、地域をとらえ直すことで新たな課題を発見しつつ、より地域の現状をふまえた課題解決を考えていきます。

事後学習では、聞き取った内容や考察をグループでまとめ、報告会の場で共有します。自分とは異なった視点や意見があることに気づくことで視野を広げ、物事を多面的に見ることができるようになっていきます。また、フィールドにおける自分の行動を振り返って自己評価をすることや、地域の方々へお礼状を出すことも大切にしています。

生徒の振り返りを見ると、フィールドワーク

には探究意欲や課題解決に対する関心を高める効果があり、仲間との議論や協働作業といった学習方法が有意義であることに気づく機会となっていることがわかります。

● 探究学習のプロセス



下諏訪町御田町商店街における班別聞き取り調査の様子。前日には原雅廣氏(NPO法人匠の町しもすわあきないプロジェクト専務理事)のお話をうかがい、当日夜には宿舍で振り返りを行います。

探究の技能を繰り返し学ぶ

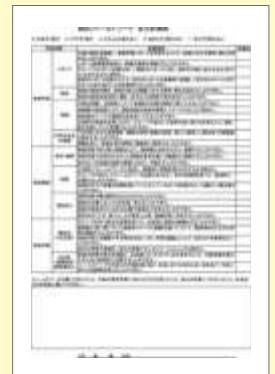
探究に必要な技能は一朝一夕に習得できるものではありません。1年生の早い段階か

担当者の関わり方

① 自主的に学ぶ姿勢を育てる

学年単位で実施するフィールドワークは、「フィールドで科目担当教員が細かい指示をできない」ことがデメリットとしてあげられますが、この状況は「生徒が主体的に行動せざるを得ない」というメリットにもなります。メリットを最大化できるように、生徒にはフィールドワークの事前学習・現地調査・事後学習のそれぞれの段階における到達目標を示した「フィールドワーク評価表」を事前に提示し、フィールドにおいてどのような行動を取るべきかをその場で確認するよう促しています。

諏訪FW評価表



拡大版をご覧になりたい方は本校HPをご覧ください。
<http://www.fz.ocha.ac.jp/fk/menu/study/spread.html>

I年時の担当者の関わり方のポイント

	グローバル 地理	持続可能な 社会の探究I	外部関係者
1. 探究の技能を身につける	●		
2. グローバルな課題を知る	●		●
3. 探究テーマを設定する	●	●	
4. 所属講座を決める	●	●	
5. 所属講座の活動について知る		●	
6. 探究の手法に関する事前指導		●	●

生徒の探究活動の効果を最大化するため、「グローバル地理」と「持続可能な社会の探究I」の接続をなめらかにできるよう、1年次の活動であっても、探究のテーマ設定は2年次の「探究I」担当者が中心となり指導しています。

ら、技能を身につけることを意識することが大切だと考えています。らせん階段状に繰り返し指導することで、2年次以降の本格的な探究活動の質が向上します。地図の読図、統計、資料の分析などの地理的技能だけでなく、正しい情報の取得方法、参考・引用文献の示し方等、レポートや論文の執筆ルールの指導にも力を入れています。また、担当者からの指導に加え、専門家の方も積極的に借りるようにしており、お茶の水女子大学附属図書館担当者による「図書館活用に関する講義」や大学教員による「社会調査に関する講義」などを実施しています。

課題解決のツールの一つとして地図が有用であることを過去の事例から学ぶとともに、生徒自身が手描きで主題図を作り社会的な

課題を地図化し、発表し合うことで社会課題を共有します。コンピューターを使って地図と統計を組み合わせるGISソフトの活用にも全員がチャレンジしています。



生徒が作成した非常時お茶大自然活用マップ。お茶大が災害時の緊急避難場所に指定されていることに着目し、キャンパス内の植物を災害時に活用する方法を地図化したものです。

担当者の関わり方

② 能動的に調査できる フィールドを用意する

探究的に学ぶ姿勢を育てるには、見学・観察にとどまらないフィールドワークになるよう工夫することが大切です。生徒の振り返りを見ると、2泊3日のフィールドワークの中でも、特に地元商店街における班単位の聞き取り調査の経験を通して、地域を本質的にとらえられるようになる様子がうかがえます。

グローバル地理

2

グローバルな課題を知る

諸課題の背景、関係を考える

1学期の終わりからは「グローバルな社会課題」について学びます。2学期にかけて、自然環境と防災・減災、環境問題、資源・エネルギー問題、食料問題、人口問題とジェンダー、居住・都市問題、生活・文化の多様性と摩擦といったテーマを幅広く学習します。3学期には、世界の諸地域に目を向け、それぞれの地域の地域的特性と「グローバルな社会課題」の関係を見ていきます。

「グローバルな社会課題」を学ぶにあたっては、課題が生じたメカニズムはどうなっているのかを考えさせ、社会事象には必ず因果関係

があることなどを意識させるようにしています。そうすることで、解決策を考える際、原因に働きかけることが処方箋の基本であることに気づくとともに、諸課題が単独で存在するのではなく、複雑に絡み合っていることも理解していきます。担当者の授業だけでなく、大学など専門分野の研究者による特別講義を年数回実施し、専門的な学問分野への興味・関心や知識を深める機会を設けています。

授業と並行して、生徒それぞれが課題を設定し、解決に向けた探究を行い、その成果を個人やグループで地図や論文、記事等にまとめ、外部に向けて発信するという学習サイクルを繰り返し、考察を深めています。

担当者の関わり方

③ 外部から 客観的評価をもらう

校内外へ学習成果を発信する効果は、その準備の過程で理解を深めたり、プレゼンテーション能力を高めたりするだけではありません。外部の専門家からの客観的な評価を得ることで、自身の探究をより多面的にとらえ、その質を向上させることにもつながっていきます。また、積極性やチャレンジ精神を養う効果もあります。

3

探究テーマを設定する

自らの課題意識にそったテーマを設定させる

冬休みには次年度の「持続可能な社会の探究I」で探究していくテーマを設定します。そのため、「グローバル地理」においては2学期中に一通りのグローバルな諸課題に関する学習を終えられるよう年間計画を作成しています。多くの生徒は「グローバル地理」で学んだ課題の中から特に関心を持ち、その解決策を模索したいと考えた課題を選び、テーマを設定します。中には「グローバル地理」で扱っていないテーマを設定する生徒もいますが、質の高い探究活動を1年間続けていくためには、モチベーションが非常に大切なので、生徒が設定したテーマを否定することはしません。

探究活動のテーマを設定するとともに、「持続可能な社会の探究I」のどの領域のどの講座に所属し、どのような手段で解決策を模索するかについても考えることになります。その

際、生徒が視野を狭めてしまわないよう、また、関心を持った課題を多面的にとらえられるよう、3領域それぞれにおいてどのように探究していけるかを考えさせ、テーマを設定させています。

●「探究I」の領域・講座

生命と環境領域	「経済発展と環境」 「生命・医療・衛生」
経済と人権領域	「国際協力とジェンダー」 「国際関係と課題解決」
文化と表現領域	「情報技術と創造力」 「言語に依存しない情報発信」 「音楽のグローバル化」

「持続可能な社会の探究I」では3領域7講座を設け、生徒の多様な課題意識や解決へのアプローチに対応しています。

担当者の関わり方

④ 生徒の課題を見る
視野を広げる

「グローバル地理」では、11月頃から課題を多面的に見ること、課題解決には様々なアプローチが考えられることを、生徒がよりしっかりと意識できるよう強調して伝えていきます。そうして生徒が3領域全てでテーマを設定できるよう支援しています。また、冬休み前には「持続可能な社会の探究I」の全講座担当者が、所属生徒の探究テーマや活動内容を伝える説明会を開いています。それぞれの生徒が課題への関心を探究テーマに繋げられるよう、「グローバル地理」「探究I」双方から働きかけています。

4

所属講座を決める

もっとも充実した探究活動ができる講座を見つける

生徒の所属講座は、「持続可能な社会の探究I」の各講座を担当する教員らが、提出された受講希望申請書を読み、生徒が3領域のそれぞれについて設定したテーマを比較し、探究活動がスムーズに進みそうなテーマはどれか、その生徒の課題意識がどこにあるのか等について検討し、最も充実した探究学習ができそうな講座に振り分けています。

当初、1つのテーマを設定させ、そのテーマを設定した動機や探究計画を詳細に書かせたうえで、受講希望講座を1位から7位まで書かせ、所属講座を振り分けていました。しかし、この方法では第一希望の講座に入れなかった生徒に、モチベーションが下がり、積極的に探究活動に取り組めずに一年間を過ごしてしまう傾向が見られました。自分の関心のあるテーマについて、多方面からのアプローチを

考えておくことにより、第二希望の講座に入った時にもモチベーションを下げず、積極的に探究に取り組める生徒が多くなりました。

● 受講講座希望申請書

拡大版をご覧になりたい方は本校HPをご覧ください。
<http://www.fz.ocha.ac.jp/fk/menu/study/spread.html>

担当者の関わり方

⑤ 生徒の探究への
意欲を高めるために

各講座の所属生徒数を均等にすることはせず、所属生徒数の多い講座の担当者を複数にすることで、きめ細かい支援ができるよう努めています。

受講講座希望申請書には、3領域でテーマ設定をさせる一方、探究動機や計画を詳細に記すことは求めません。また、第一希望以外の講座に入ることになる生徒に対しては、その講座の方が適しているとする理由を説明するなどして、生徒がモチベーションの高い状態で探究活動を始められるよう働きかけています。

探究I

5

所属講座の活動について知る

異学年交流による学び

所属講座が決まると、2月後半にLHRの時間を活用して、講座担当教諭と所属生徒の顔合わせを行い、次年度の活動内容について相談します。講座担当者は、これまでの活動内容等を紹介するとともに、生徒の課題意識を聞き、生徒の関心に合わせて年間計画を修正し、生徒は5月のフィールドワークに向けた準備を始めます。

3月の成果発表会の後には、「持続可能な社会の探究I」の講座ごとに、探究活動を経験した2年生とこれから取り組む1年生の交流の場を設定しています。1年生は、2年生から1年間の活動内容や方法、成功体験や失敗談を聞くことにより、探究活動のイメージを明確にし、不安を解消することができます。テーマが似てい

る場合には、2年生の探究の成果をふまえて自分の探究を始めることも可能になります。



3月の成果発表会後に実施している講座ごとの異学年交流の様子。1年生は2年生の話に熱心に聞き、積極的に質問をします。

担当者の関わり方

⑥ 主体的に活動を始められるよう後押しする

講座の目標や活動内容を生徒に知らせるとともに、生徒の希望を確認することが大切です。そうすることにより、生徒が設定したテーマについて視野を広げつつ探究活動を進められるよう、校外学習の行き先や特別講義の講師等をアレンジし、年間計画を作成することが可能になります。異学年交流の場では、生徒同士の交流を深められるよう、教員はファシリテーターに徹します。

探究I

6

探究の手法に関する事前学習

ブレ探究I

ーグローバル地理のまとめー

3月には、2年次からの本格的な探究学習に向けた事前指導を行います。「グローバル地理」で学んだことを、今後の1年間の探究活動で活用する場面をイメージすることが目標です。

まず、1年後の目標「こんな力をつけたい、こういう自分になりたい」を設定します。将来の自分の姿や目標をイメージできない生徒も、短期的な目標であれば見つけやすいようです。次に、今後の探究活動の進め方を確認します。生徒は2年次の講座選択をする際に探究テーマを設定しましたが、この段階では年間追究するに相応しいテーマが設定されているとは限りません。文献収集をしていくうちにテーマを変えたいことは悪いことではないこと、文献を読んで考えを整理するプロセスを繰り返していくことの大切さを確認します。また、集めた文献や情報の記録方法、フィールドワークに向けたアポイントメントの取り方なども学びます。

図書館の活用法(特別講義)

お茶の水女子大学附属図書館の方による「図書館を活用した探究方法」と第1講義を実施し、探究活動には正確な情報を集めることが必要であることやその方法を伝えていきます。図書館で必要な書籍を効率よく検索する方法や、インターネットを活用して統計データにアクセスする方法に加えて、引用した情報の示し方についても再確認しています。

社会調査法(特別講義)

お茶の水女子大学の社会学の先生による「社会調査に関する特別講義」を実施し、課題を解決するための基本となる考え方を教えていただきます。様々な課題について、なぜそのような問題が発生するのか因果関係を明らかにすることが大切であること、エビデンス(証拠)に基づく考察とは単に数字を用いることではなく、比較することが大切であることなどを学びます。

担当者の関わり方

⑦ 特別講義の活かし方

専門家による講義は高校生には難しいこともあります。講義の内容を高校の教員がその後の探究的な学習の指導に活用していくことにより、生徒の成長に繋げることができます。そのため、当日参加できなかった教員にも資料を配布し、内容の共有に努めています。

⑧ 研究倫理の伝え方

研究倫理については様々な立場から、繰り返し、注意深く指導していく必要があります。多面的な情報を取得し、それにもとづいて推論することの大切さを伝え、不利な情報を無視することのないよう、盗用・改ざん・捏造等が生じないよう丁寧に指導しています。